

東西条スマイルプラン～心に響く体験を生かした道德の時間の年間指導計画（第4学年）

テーマ:いつも心に太陽を～さかせよう コスモス わたしたちの町に!～

学校教育目標

◎豊かな心を持ち、たくましく生きぬく子どもを育成する

道德教育重点目標

- ◎ 進んで学ぶ子
- ◎ 命を大切にする子
- ◎ 手をつなぐ子

めざす4年生の子どもの姿

- 自分らしさを認め、生かす
- みんなの中でともに伸びようとする
- 自ら考え判断し、よりよく行動する

道德の時間の重点内容項目

〈1-(2)思慮・反省〉・2-(3)信頼・友情・2-(4)尊敬・感謝・〈3-(3)敬けん〉・〈4-(1)公德心・規則尊重〉〈4-(5)郷土愛〉

● 重点内容項目の指導構想

学期	教科・特別活動など	総合的な学習の時間	道德の時間		常時活動
			ロング ユニット	ショート ユニット	
一 学 期	理科 「春の自然」	花いっぱい大作戦 ○ 学校周辺の春をさがそう ○ はじめようボランティア ○ いろいろな花を植えよう ○ 力を合わせてコスモスのお世話をしよう	2-(4) 4-(5) 2-(1)	みんなのために 4-(1) 4-(1)	ふれあいそうじ・ふれあいサーキット
	図工 「花いっぱいになあれ」 社会 「命とくらしをささえる水」				
二 学 期	特別活動 「創立記念発表会」 社会 「郷土をひらく」	笑顔いっぱい大作戦 ○ コスモス街道のオープニングの会を計画しよう ○ 力を合わせてオープニングの準備をしよう ○ 地域のボランティアに学ぼう	4-(2) 4-(5) 4-(4)	友だち発見 2-(2) 2-(3)	学級活動
	国語 「ウミガメのはまを守る」				
三 学 期	特別活動 「自分を大切に」	心に花をさかせよう ○ 見つめよう自分の成長 ○ 2分の1成人式を計画しよう ○ 伝えようコスモス街道	3-(3) 3-(2)	自分発見 1-(5) 1-(2)	
	国語 「1年間の思い出をしようかいしよう」				

(太字が重点項目)

第4学年1組 道徳学習指導案

友だち発見

「大きな絵はがき」【ショートユニット】 2—(3) 信頼・友情

出典『ゆたかな心で』平成12年度版 東京書籍

本時のねらい

友だちと互いに信頼し合い、友情を深めていこうとする実践意欲を高める。

T・Tによる児童の実態把握を活用する授業

指導者 東広島市立東西条小学校 保手濱 哉子 (T₁)
石川 真紀 (T₂)

1 主題設定の理由

◎ねらいとする価値

よりよい友だち関係を築くためには、お互いを認め合い、助け合い、理解し合いながら、信頼感を育てることが大切である。互いの信頼があって心の安定が図られ、楽しい生活が送られるのである。しかし、どんなに仲のよい友だちでも、日々生活をともにしていれば、楽しいことばかりではない。時には、友だちの非や不知による言動に対して、忠告したらよいものかどうか迷うことはよくあることである。仲のよい友だちに忠告するのは大変勇気がいる。それは「友だちを傷つけるのではないか」「今のよい関係が崩れてしまうのではないか」といった不安があるからである。

しかし友だちだからこそ、思いやりをもって忠告し合いながら互いに向上前進を図ることは大変重要なことであり、真の友情をはぐくむことにつながるのである。

◎心に響く資料

本資料は、料金不足の定形外郵便をもらった広子が、送り主である友だちの正子に忠告しようかどうかと迷う葛藤資料である。兄の「友だちなら教えてあげたほうがいい」という考えと、母の「お礼だけ言っておいたほうがいい」という考えの間で揺れ動くが、仲のよかった今までの出来事を思い出し、「きっと分かってくれる」と考えて教えてあげることを決心するという資料である。短絡的な決心でなく、兄や母の示唆を考え、友人の立場や心中をも推察しながら、しかも友人を信頼しての忠告であるところに、広子の友情の深さがある。友情の真のあり方について考えを深めるのに適した資料である。

◎価値の自覚を深める工夫

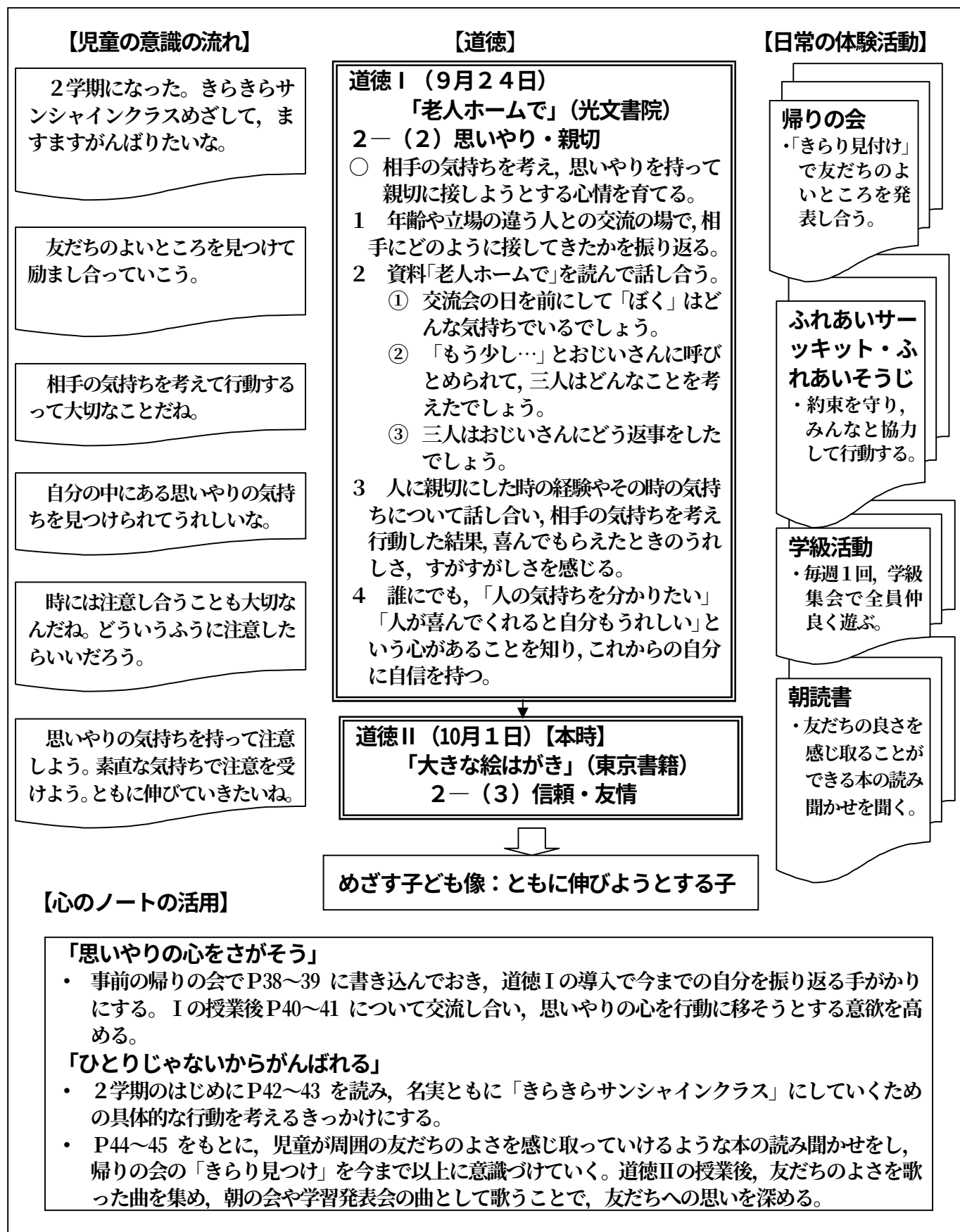
同一視点の2時間連続で「友だち発見」のユニットを構成する。前時では、相手の気持ちを考えた思いやり・親切について学習した。本時では、自分の中にある思いやりの気持ちを再認識させ、さらにこれからの生活で、互いに信頼し合い、時には注意し合いながら友情を深めていこうとする実践意欲を高めたい。

展開後段で、再度、導入での発問をすることにより、本時での児童の価値の自覚の深まりを確かめたい。その際、日頃から音楽の授業で児童とかかわりの深い音楽専科とT・Tを組み、児童の実態把握に基づいた意図的指名を取り入れることで、ねらいに迫り価値の一般化を図る。

◎児童の実態

本学級は、3年生からクラス替えがなく、数名の転出入児童と担任が替わったことを除けば、昨年からの気心の知れた者同士である。4年生になって、「いつも心明るいクラスをめざそう」と話し合い、「太陽（きらきらサンシャインクラス）」を合い言葉に生活してきた。「友だちは何人いますか」という質問に「10人以上」と答えた児童が約60%おり、中には「50人以上」という児童もいた。日常生活では、いつも数人の気の合う者で遊んでいるが、クラス全員で遊ぶ活動を取り入れても喜んで仲良く遊ぶことができる。友だちが困っていると積極的に助けたり、励ましたりする児童もおり、仲間意識も育ちつつある。その一方で、友だちが間違った行動をとった時に厳しい口調で指摘したり、おかしいと感じながらも遠慮して言えなかったりする場面もよくある。

2 前時の主な学習活動と日常の体験活動との関連



3 本時の指導過程

	学習活動（主な発問と予想される児童の反応）	指導上の留意点・教師の役割
導入	1 「よりよい友だち関係」について話し合う。 ★みんなにとって「友だち」とは、どんな人のことですか。 ・一緒に遊んでくれる人。・困った時に助けてくれる人。	○児童が素直に思っていることを受け止めるようにする。表面的などらえでもよい。
展開前段	2 資料「大きな絵はがき」を読み、話し合う。 ○母と兄の意見を聞いて、広子はどんなことを考えたでしょう。 （母の意見と同じでお礼だけ言う） ・お金のことを言ったら、きられるだろうな。 ・せっかくきれいな景色を見せたいと思って送ってくれたのだから。 （兄の意見と同じで教えてあげる） ・まちがいは教えてあげた方がいい。 ・また同じまちがいを繰り返すかもしれない。 （迷う） ・友だちとしては、どっちにしたらよいだろう。 ・教えてあげたいけど、いいにくい。 ◎広子は、どうして正子に教えてあげようと思ったのでしょうか。 ・正子さんのことを思えば、教えてあげた方がいいから。 ・仲良しの正子さんならきっと分かってくれると思ったから。	○夏休みに手紙のやりとりを経験したことを想起させる。 （T1）発問 （T2）板書 ○T2は、児童の立場や考えが視覚的に捉えられるようにネームプレートを活用して板書する。 ○T1が母親側、T2が兄側の立場をとり、価値を深めたり揺さぶりをかけたりするような切り返しをする。 ○どちらの立場であっても、正子を思いやる気持ちが大切であることに気付くよう、価値の類型化をしながら板書する。（T2）
展開後段	3 真の友情について考える。 ★☆「本当の友だち」とは、どんな人だと思いますか。 ・自分が間違ったことをしたら、教えてくれる人。 ・自分が困っている時、一緒に悩んだり考えたりしてくれる人。 ・いつでも自分のことを思ってくれる人。 ・いいことも悪いことも何でも言い合える人。 ・何でも一緒に頑張っていこうとする人。	○一人一人がワークシートに記入することで、しっかり自分を見つめることができるようにする。 ○手紙のやりとりを扱った本時の資料から日常生活へ一般化することができるように、事前に T1・T2で実態把握をし、日記の紹介や意図的指名を行う。
終末	4 「ビリーブ」を歌う。 ★☆みんなで歌詞をかみしめながら「ビリーブ」を歌いましょう。 ・時には注意し合っていっしょにのびていけたらいいな。	○「ビリーブ」の歌詞と児童の生活の様子をプロジェクターで映すことにより、さらに友情を深めていこうとする意欲を高める。（T2）機器操作

○基本発問 ◎中心発問 ★今までの自分を見つめる発問 ☆これからの自分を見つめる発問

4 教師の評価の観点

- 道徳的価値（信頼・友情）を自らとのかかわりでとらえ、時には相手を思いやった行動をして、友情を深めようとする自分なりの思いが培われていたか。
- T・Tによる児童の実態把握は、有効であったか。

5 児童の自己評価の観点

- ①いつもの自分を見つめることができたか。
- ②友だちの考えをしっかりと聞いて、自分の考えを深めることができたか。
- ③これからの自分に自信を持つことができたか。

6 資料

大きな絵はがき

広子が、学校から帰って、楽しみにしていた本を読み始めようとしたときでした。げんかんのほうから、

「ゆうびんです。不足料金おねがいできますか。」
という声が聞こえてきました。

広子が出て行くこうすると、ちょうどそこへ、高校生の兄が帰ってきました。

「百二十円になりますので、七十円不足です。」

ゆうびんはいたつの人は、そう言って、兄に「まいの絵はがきをわたしました。兄は不足料金をはらって、受け取りました。」

兄は、その絵はがきを広子にわたして、

「こんなに大きい絵はがきは、料金を調べて、きちんと切手をはらなければいけないんだよ。その人は広子の友だちだろう。教えてあげたほうがいいよ。」
と言いました。

絵はがきは、九月のはじめに転校していった、なかよしの正子から来たもので、ふつうのはがきよりずっと大きい絵はがきでした。それには、もみじのきれいな高原の中を、一すじの白い道がつづいているけしきが写されていました。

あて名の下には、次のように書いてありました。

「広子さん、お元気ですか。わたしは、このあいだ、たでしな蓼科高原に行ってきました。とてもきれいなけしきでした。それで、絵はがきをお送りします。来年の夏休みには、いっしょに行きませんか。さようなら。」

正子は、ふつうのはがきと同じに考えたのでしょうか。左上には五十円の切手をはってありました。

広子は、正子といっしょに高原へ行ってみたいなあと思いました。さっそく返事を書くこうと思いましたが、さっき兄の言ったことが気になってきました。

正子が、せっかく、きれいなけしきを見せたいと思って送ってくれたのに、切手が不足でしたなんて書きたくなかったのです。そんなことを書いたら、正子はきつといやな気持ちになる、と思ったのです。

母に相談してみました。母は、

「お礼だけ言っておいたほうがいいかもしれないね。」
と言ってくれました。兄が、そばで、

「いや、ちゃんと言ってあげたほうがいいよ。」
と言いました。

広子はまよってしまいました。部屋にもどって、どちらにしようかと、一人で考えました。

いろいろ考えているうちに、友だちとしてすごしてきたこれまでのことを、なつかしく思い出しました。

（正子さんは、ほかの人にもこの大きな絵はがきを五十円で送るかもしれない。）

と考えた広子は、手紙のさいごに、百二十円の切手をはらなければならぬことを書き足してあげようと思いました。

（正子さんなら、きっとわかってくれる。）

そう思うと、急に気持ちがすっきりして、広子は返事を書き始めました。

（辺見兵衛作「絵葉書と切手」による）

